

研究課題	平安時代の密教寺院における造仏の調査研究
研究代表者	杉田 美沙紀 (文学研究科 史学専攻 博士後期課程)

## 1. 研究目的

日本彫刻史において 8 世紀末から 9 世紀には、それまでの日本にはなかった新しい形と作風の仏像が多くつくられた。この時代には本格的な密教が唐から日本に伝わって受容され、造寺造仏に大きな影響を与えた。

この時代の仏像には以前の時代には見ることでできなかった、おおらかさ、激しさ、躍動感などの新しい表現が見られる。このような表現の展開には、その背景に、大陸からの文化の影響とともに、それまでの既存の文化からの変化を求める内在的な要因があったとも考えられる。

それに続く 10 世紀の仏像の展開は、後の 11 世紀の和様彫刻の完成に向かう過渡的な時代として位置づけられることが多い。そのために、従来はこの 10 世紀の仏像はあまり重要視されないことがあったが、近年、いくつかの研究によって制作年代の明らかな基準的作品が紹介され、この時代の作品が平安時代の仏像の展開の理解に重要であることが次第に認識されている。

本研究では、この 10 世紀の仏像の展開について、とくに京都とその周辺の密教寺院に伝わる遺品を具体的に考察し、それによって平安時代の仏像の歴史をより正確に明らかにしたい。このことはまた、美術史以外のさまざまな分野でも論じられることが多い、平安時代における国風文化の成立と展開を考えるためにも重要であると思われる。

申請者は前年度「平成 29 年度 大正大学大学院学術研究助成金」を受給し、10 世紀前半の彫刻作品の調査、研究を行い、その成果の一部を第 37 回密教図像学会学術大会で発表した（2017 年 12 月 2 日、論題「十世紀初頭の醍醐寺諸像と木造如意輪観音半跏像」於高野山大学）。

今年度は、その成果を踏まえて、それ以外の 9 世紀末から 10 世紀に造立された仏像について詳しく検討し、この時代の仏像の作風展開と造像事情をより明らかにするために、以下に記す諸作品の研究をおこなった。

## 2. 研究方法

### (1) 詳細な調査と文字および画像による記録

#### 【対象作品】

- ①木造如意輪観音半跏像（像高 97. 1 cm） 京都府醍醐寺蔵（霊宝館安置） 時代 10 世紀前半
- ②木造如意輪観音坐像（像高 49. 0 cm） 京都府醍醐寺蔵（霊宝館安置） 時代 10 世紀後半 重要文化財
- ③木造阿弥陀如来及び両脇侍坐像（中尊像高 178. 0 cm） 京都府清凉寺蔵（霊宝館安置） 時代 寛平 8 年（896）国宝
- ④木造愛染明王坐像（像高 103. 3 cm） 長野県長雲寺蔵（収蔵庫安置） 時代 寛文 13 年（1673）

＊本像は江戸時代の作であるが、その台座の表現は、①木造如意輪観音半跏像の後補の台座とよく似ている。①の作品の江戸時代における修理の背景を理解できる可能性があるために、とくに調査対象にとりあげた。

#### 【調査方法】

各作品は、ご所蔵者の許可を受けた後に、像を光背、本体、台座にわけて、現地において詳細な文化財調査を実施した。法量、形状、品質構造、保存状態、銘文および納入品の有無について細部まで記述し、銘文については、当初の造立銘以外の後世の修理銘を含め、すべて画像と筆写によって記録した。

とくに②、④の作品についてはフルサイズ一眼レフカメラによる精細な画像を撮影し、また必要な部分については赤外線カメラによる撮影を実施した。4 作品の調査で撮影記録した画像はおよそ 350 コマである。調査、撮影には副島弘道本学名誉教授のご指導いただき、また本学総合仏教研究所研究生久保田綾氏、大学院修了生有山佳孝氏、卒業生長谷川高隆氏らの協力を得た。この場を借りて、ご所蔵各位と、調査にご協力いただいた諸氏に感謝申し上げる。

なお、上記の 4 作品以外にも、東京国立博物館特別展「国宝東寺―空海と仏像曼荼羅」に出陳された京都府東寺講堂諸尊像（承和 6 年〈839〉頃）、木造聖僧坐像、木造地藏菩薩立像、京都府観智院蔵木造五大虚空蔵菩薩像について、会場で詳しく熟覧し、調書を作成した。

#### (2) 関連する画像、図版資料の収集および整理

本研究に必要な、8 世紀から 11 世紀の日本および東アジア諸地域の仏像などの彫刻作品、および関連する絵画作品の画像データと図版の収集を行った。収集には公刊されている書籍のほかに各地の博物館美術館が公開しているデータベースなどを用い、また諸研究者のご好意によって、未公刊の画像資料を入手した。

#### (3) 史料の収集と整理

京都府醍醐寺が所蔵し、副島研究室で整理した、明治から昭和期に記された文化財目録を利用させていただいて、対象作品の明治以後の移動、安置堂宇などの来歴を検討した。

また『新撰京都叢書』（臨川書店 1985-89 年）、『新修京都叢書』（臨川書店 1993-95 年）所収の地誌類から清凉寺および醍醐寺に関わる部分を収集し、江戸時代における寺内の安置仏の状況を検討した。

#### (4) 作風検討と考察

以上によって得られた資料から、対象作品を関連作品と比較検討して、その作風、表現、造像技法などの特色を理解し、それによって制作年代と造像背景、および造立後、今日にいたるまでの来歴を具体的に検討した。

### 3. 研究成果と公表

#### (1) 得られた成果

##### ①木造如意輪観音半跏像

本作品については、前年度の調査、研究により、延喜 13 年（913）頃の作である醍醐寺木造薬

師如来及び両脇侍像（国宝）、および醍醐寺旧五大堂安置の木造大威徳明王坐像（重要文化財）との共通点から、それらとほぼ同時期につくられた可能性が高いことが推定された。また、その当初の安置場所として、12世紀には上醍醐准胝堂に置かれていた可能性が高いことが知られた。

今年度は、以上の経過に加えて、本像の後補の台座と光背を調査して、それが補作された江戸時代における本像の来歴を明らかにすることをこころみた。その結果、本像の台座は、本体の像底の銘文から知られる寛文9年（1669）の修理時に、本体の修理とともに新たに造られたことが明らかになった。また、光背は現在醍醐寺観音堂（旧大講堂）に安置されている丈六の木造阿弥陀如来坐像（鎌倉時代前期作）に付属する後補の光背とよく似た作風を示すことが明らかになった。大講堂阿弥陀如来坐像の光背は、昭和5年（1930）に像が大講堂に安置された際に造られた可能性が高く、それによく似た、本如意輪観音像の光背もその頃に造られたことが推定された。

以上の本像についての研究成果は、その一部を前年度の第37回密教図像学会学術大会で口頭発表した。今年度はその発表内容を補訂して、「醍醐寺木造如意輪観音半跏像と十世紀前半の彫刻」の題名で投稿して、それが同学会の機関誌『密教図像』37（2018年12月発行）に掲載された。

## ②木造如意輪観音坐像

本像は昭和14年（1939）に起こった上醍醐火災を機に発見された像である（注1）。その制作年代については、これまでにいくつかの説があるが、本研究では火災当時の記録をもとに、本像の発見時とその後の状況を詳しく整理した（注2）。また、本体の作風を詳しく検討するとともに、金属製の宝冠と臂釧などの装身具、および木製の蓮華座についてその詳細を検討した結果、本像がおおよそ10世紀末頃の作と考えられるという結論に達した。

この成果の一部は、平成30年度大正大学史学会大会で口頭発表した（2018年12月1日、論題「醍醐寺木造如意輪観音坐像について」於大正大学）。また、本年5月に刊行予定の総本山醍醐寺監修、副島弘道編『醍醐寺叢書 醍醐寺の仏像』第2巻菩薩、に「8木造如意輪観音坐像」としてその基本データおよび解説が掲載される予定である。

## ③木造阿弥陀如来及び両脇侍坐像

源融によって造像が始められ、その死後に彼の息子らによって完成された、造像年代がほぼ明らかな、この時代の代表的な仏像である（注3）。

脇侍像の臂釧、胸飾りなどの木製装身具はその大部分が後補のものとされているが、その独特な意匠は、本像以外の平安時代前期の仏像にもしばしば認められるものであることが明らかになった。すなわち、当該部分の詳しい写真によって、その形状と保存状態を検討した結果、一部には造立当初の可能性が認められ、また、それ以外の後世の修理部分にも、当初の造形を踏襲した可能性があることがわかった。これはきわめて重要な発見であり、今後も継続して、より詳しい検討を行いたい。

## ④木造愛染明王坐像

像底に記された造立銘によって、寛文13年（1673）に大仏師久七が造像し、醍醐寺第82代座主高賢がその開眼に携わったことが従来から知られていた（注4）。

この台座銘を含む本像の詳しい調査は、この数十年の間には実施されていなく、銘文の写真もなかったために、現地において詳細な文化財調査、および写真撮影を実施した。その結果、本像は寛文13年に造立されたことが改めて確認され、また装身具、および台座は、やはり座主高賢が修理後の開眼供養を行った①醍醐寺如意輪観音半跏像、および前年度に調査した醍醐寺木造大日如来坐像と、共通点が多いことが明らかになった。

このことによって、醍醐寺の両像の修理は、長雲寺像を造立した仏師久七によって行われた可能性が考えられる。この成果の一部は、前掲の『醍醐寺叢書 醍醐寺の仏像』第2巻菩薩の①像の解説中に触れる予定である。

本像を造像した仏師久七は金剛峯寺真然大徳坐像など複数の現存作品の造像を行っていた事が知られる(注5)。本像が長雲寺に安置されるにいたった経緯や、その造像に携わった仏師および僧侶については今後更に詳しく検討したい。

## (2) 今後の課題、展望など

以上のように今年度の本学助成金による研究によって平安時代9世紀末から10世紀末までの彫刻作品について、その作風、造像背景、図像的特色の一端を具体的に知ることができた。

今後はこの研究を継続、発展させて、さらに多くの当該時代の仏像の研究を積極的に行いたい。

(注1) 赤松俊秀「上醍醐の清瀧明神像」(『美術史』3、1951年)

(注2) 谷重雄「上醍醐の炎上」(『建築史』1-6、1939年)

岡田宥秀「想憶一准胝堂落慶に思う一」(『神変』准胝堂落慶記念号〈1968年7月号〉、同書1986年3月号に「清浄心院岡田宥秀大僧正 御遺稿」として再度掲載される)

(注3) 塚本善隆「嵯峨清凉寺史平安朝篇一棲霞、清凉二寺盛衰考一」(『仏教文化研究』5、1955年)

(注4) 『長野県史 美術建築資料編』全1巻(1) 美術工芸(1992年、社団法人長野県史刊行会)

『中興三〇〇年真言宗智山派稻荷五大院長雲寺』(2005年、稻荷山五大院長雲寺) ほか

(注5) 宮崎恵仁「金剛峯寺真然大徳坐像の作者 仏師久七康以について」(『研究紀要』1、1995年、高野山霊宝館)